



Title	沖縄島大度海岸におけるヒメサンゴヤドリガニ Pseudohapalocarcinus ransoniと宿主サンゴの分布
Author(s)	本門, 奈央子; 土屋, 誠
Citation	琉球大学21世紀プログラム「サンゴ礁島嶼系の生物多様性の総合解析」平成18年度成果発表会
Issue Date	2007-03-10
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/691
Rights	

沖縄島大度海岸におけるヒメサンゴヤドリガニ
Pseudohapalocarcinus ransoni と宿主サンゴの分布
(The distribution of coral gall crab *Pseudohapalocarcinus ransoni* and its host
corals in the Odo Coast Lagoon, Okinawa)

本門奈央子・土屋 誠 (Naoko Motokado and Makoto Tsuchiya)

琉球大学理工学研究科

熱帯・亜熱帯域に広がるサンゴ礁には、複雑で変化に富んだ群体形をもつ造礁サンゴの存在によって実に様々な環境が作りだされ、多くの動物によって利用されている。ヒメサンゴヤドリガニ *Pseudohapalocarcinus ransoni* (サンゴヤドリガニ科 Cryptochiridae) は、イシサンゴ類の群体骨格を棲みかとして利用するサンゴヤドリガニ類の一種であるが、その特殊化した生態については未だ明らかになっていないことが多い。本種の生態を知る上で、宿主サンゴの分布および宿主サンゴ上における本種の分布は重要な情報となる。そこで、沖縄島南部に位置する大度海岸の礁地内において、シコロサンゴ類 3 種 (コノハシコロサンゴ *P. frondifera*, サオトメシコロサンゴ *P. cactus*, シコロサンゴ *P. decussata*) およびこれらを宿主として利用するヒメサンゴヤドリガニの分布調査を行った。

シコロサンゴ類 3 種は大度海岸の礁地内全域でみられたが、そのうち集中的に分布している場所があった。また 3 種のうちコノハシコロサンゴが最も多く見られた。カニ瘤の分布はシコロサンゴ類の分布とほぼ重なっていた。カニ瘤はシコロサンゴ類 3 種のいずれにも存在していた。宿主サンゴの分布は礁池内の底質や水深などの環境条件との関連がみられたため、礁池内の環境条件についてより詳細な調査を行う必要がある。また、宿主サンゴの分布の偏りは本種の幼生が宿主サンゴに定着する過程に影響を与えている可能性があるため、幼生の分散および定着過程を明らかにする必要がある。

シコロサンゴ類の群体サイズとカニ瘤の数には正の相関があり、大きな群体ほどカニ瘤が多かったことから、カニ瘤の分布は宿主サンゴの群体サイズによって制限されると考えられる。群体サイズとカニ瘤の密度 (100 cm²あたりのカニ瘤の数) は逆の傾向を示し、大きな群体ほどカニ瘤の密度は小さくなったことから、大きな群体ではカニ瘤が偏って存在していることが予想される。

礁地内のシコロサンゴ類の群体のうち 73%の群体にカニ瘤が見られた。これは宿主サンゴと寄生関係にあるとされる他のサンゴヤドリガニ類に比べて非常に高い割合であり、二者の関係が寄生関係でないことを示唆している。しかし、ヒメサンゴヤドリガニのカニ瘤形成が宿主サンゴにどのような影響を及ぼすかは分かっていないため、二者の関係を明らかにするには宿主サンゴの形態また生理的視点からのさらなる研究が必要である。